

<b>1826年</b>	ルイ・アンリ・ドゥニ・ジャドは叔父からぶどう栽培とワインづくりを学んでいたが、同年、彼からボース・クロ・デ・ズルシュールの畑を相続する
<b>1859年</b>	ボースに同社を設立、主にフランス北部やブルゴーニュ・ベルギーにワインを出荷
<b>1900年</b>	息子のルイ・ジャン・パプテストが同社を継承
<b>1939年</b>	3代目のルイ・ジョセフ・オーギュスト・ジャドが会社を継ぎ、アメリカ&イギリスへの輸出を拡大
<b>1954年</b>	アンドレ・ガジェ入社。1962年3代目の逝去によりジャド夫人から依頼があり、社長に就任
<b>1970年</b>	醸造家ジャック・ラルディエール入社
<b>1984年</b>	アメリカのコフ・ファミリーがジャド夫人から同社を購入、自社畑の拡大に力を入れる。ガジェは3代目未亡人を説得し、アメリカへの売却を決めたが、ボースでは大きなスキャンダルとなった。理由はフランス企業がアメリカ人に買収されたことが、フランス人からみると許せない行為と受け取られたから。
<b>1985年</b>	ガジェの息子ピエール・アンリ・ガジェが入社。1992年に父親から最高経営責任者職を引き継ぐ。
<b>1986年</b>	ドメヌ・クレール・ダユ17haを購入。この後、様々なプルミエ・クリュ、グラン・クリュの畑を購入。
<b>1994年</b>	イギリスにワインの輸入販売を行なうハッチ・マンズフィールド社を設立。アメリカでは姉妹会社によってすでに同社のワインは販売されていた。
<b>1996年</b>	ムーラン・ナ・ヴァンのシャトー・デ・ジャックを購入、同年樽工場のカディスを設立。樽工場では樽板の熟成のコントロールを強化。

<b>1997年</b>	ボースに新醸造所『ラ・サブリエール』完成。上質なワインづくりのためにはベーシックなワインの品質を上げることが大事というのが同社の考え方。
<b>1998年</b>	ボージョレ・ヴィラージュの一部を自社醸造するために、新醸造所『コンボージャック』を設立。ワインの品質向上に努めており、“1チーム1ワイン”の体制を取っている。
<b>2000年</b>	日本リカー(株)の株式取得
<b>2001年</b>	モルゴンにある『シャトー・ド・ベルヴェー』を取得。『ラ・コンボージャック』の施設拡張により、醸造能力が倍増。
<b>2008年</b>	150周年を迎えるにあたり、取り込んだ事柄①『ジャコバン修道院』大改装、②コート・シャロネーズに新醸造所を建設、主としてブルゴーニュ・ルージュ(リージョナル)の生産にあてることが目的。タンクは3タイプあり、ぶどうの状態に合わせてセレクト。樽熟成庫も完備。③同社のHP ( <a href="http://www.louisjadot.com">http://www.louisjadot.com</a> )をリニューアル、若干の日本語あり、携帯サイトからのアクセスも可。
<b>2009年</b>	サブリエール醸造所の拡大。収穫のサイクルが異なる白ワイン、赤ワインの醸造所を別にするための作業。グラン・ヴァン専用の樽熟成庫。増築している醸造所の形状はオーヴァルと呼ばれる楕円形の施設で、ラグビーボウルのような2つの円が重なっており、1つは地球・土、もう1つは空・天国を意味する。これらが交わることでエネルギーがFIXできるという。同社ではビオダイナミ農法を取り入れており、その思想を反映したものが増設中の醸造所である。